

令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第1号（5月予報）

令和3年4月27日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は5月を主とします。次回の発表は令和3年6月1日の予定です。</p> <p>◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>苗いもち（苗の葉いもちを含む）の発生量はやや多いと予想されます。育苗期のいもち病防除は必ず行き、伝染源となる稲わらや籾殻は育苗施設やその周辺に置かないでください。</p> <p>苗立枯病の発生量は平年並と予想されます。育苗期間中は温度管理に注意し、土壌の湿度を適切に保つようにしてください。</p>
小 麦	<p>赤かび病の感染時期は平年並、感染量はやや多いと予想されます。1回目の防除は開花始期とし、2回目は1回目の防除から7～10日後に行ってください。</p>
大 豆	<p>タマナヤガの発生量はやや少ないと予想されます。本種は飛来性害虫であり、急激に発生量が増加することがあるので、今後の予察情報に注意してください。播種前にほ場内やほ場周辺の除草を行ってください。</p>
えだまめ	<p>えだまめのネキリムシ類（タマナヤガ）の発生量はやや少ないと予想されます。例年被害が見られるほ場では、薬剤を塗抹処理した種子を播種するなどの防除対策を行ってください。</p>
果 樹	<p>果樹の生態は平年よりやや早い～早く推移しているので、りんごやなしでは開花直前の防除が遅れないよう注意してください。</p> <p>りんごの病害では腐らん病の発生が多いと予想されます。樹体検診を行い、早期発見・治療に努めてください。黒星病の発生量は平年並の予想ですが、発生状況によって開花期前後の防除薬剤の選択に注意が必要です。虫害ではナミハダニの発生量が多いと予想されます。徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の2回行ってください。</p> <p>なしの病害では黒星病がやや多いと予想されます。芽基部病斑は見つけ次第速やかに切除し処分してください。虫害ではナミハダニの発生が多いと予想されます。不要な徒長枝は剪去し、焼却してください。</p>

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	やや多い
	苗立枯病 (ピシウム菌) (リゾーブス菌)	全県	—	—	平年並
		全県	—	—	平年並
		全県	—	—	平年並
	イネミズゾウムシ	全県	平年並	—	やや少ない
	イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	全県	平年並	—	やや少ない
	イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	全県	やや早い	—	やや少ない
フタオビコヤガ(第1世代) (イネアオムシ)	全県	平年並	—	やや少ない	
イネキモグリバエ (イネカラバエ)	全県	—	—	少ない	
小 麦	赤かび病	全県	平年並	—	やや多い
	うどんこ病	全県	—	—	やや多い
大 豆	タマナヤガ	全県	—	—	やや少ない
えだまめ	ネキリムシ類 (タマナヤガ)	全県	—	—	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	多い	多い
	モニリア病	県北部	早い	—	平年並
		県中央部・県南部	やや早い	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	早い	—	平年並
	ナミハダニ	全県	—	—	多い
	リンゴハダニ	全県	—	—	平年並
	ハマキムシ類	全県	—	—	平年並
果樹カメムシ類	全県	平年並	—	平年並	
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	早い	—	やや多い
	黒斑病	県北部・県中央部	早い	—	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	—	多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	—	平年並
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	平年並	—	平年並
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	—	平年並

水稻育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意

水稻育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬がハウス内土壌に浸透しないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で散布してください。
詳細は令和3年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	やや多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温、降水量及び日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている(/±)。
- イ、前年の穂いもちの発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

○ 苗の葉いもち

- ア、育苗施設の周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かない。
- イ、育苗期間に1個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設の苗は移植しない。
- ウ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施する。

- ① ベンレート水和剤 500倍液を箱当たり500mL又は1,000倍液を箱当たり1L、播種時～播種7日後頃にかん注する。
- ② ビームゾル 500倍液を箱当たり500mLを緑化始期にかん注する。

エ、種子消毒にタフブロック又はエコホープDJを使用した場合は、上記ウ①のうち播種時処理を行わない。

○ 本田の葉いもち

- ア、育苗期間～移植当日に施用する本田の葉いもちを対象とした防除薬剤には、箱施用剤、側条施用剤があり、防除効果の持続期間は7月中旬頃までである。
- イ、県内でQoI剤(ストロビルリン系剤)に対する耐性菌が確認されているので、本剤は使用しない。

ウ、箱施用剤を使用する場合は、次のいずれかの方法で防除する。薬剤によって使用時期が異なるので注意する。

- ① アプライ箱粒剤、デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、ブイゲット箱粒剤のいずれかを箱当たり50g散布する。
- ② ファーストオリゼ箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤(いずれもプリンス剤との混合剤を含む)及びルーチン粒剤のいずれかを箱当たり25～50g散布する。箱当たり散布量が25gとして使用可能なのは、10a当たりの使用箱数が20箱以上の場合である。
- ③ ルーチンフロアブル 100倍液を箱当たり500mL散布する。

エ、側条施用剤を使用する場合は、次のいずれかの方法で防除する。

- ① ペースト肥料では側条オリゼメート顆粒水和剤又はツインターボ顆粒水和剤で行う。
- ② 粒状肥料ではコープガード剤で行う。
- ③ 移植同時施薬機を用いる場合は、オリゼメート粒剤20、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤/ルーチンデュオ箱粒剤/ルーチンパンチ箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤、箱大臣粒剤、Dr.オリゼパディート粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤のいずれかで行う。

ただし、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤/ルーチンデュオ箱粒剤/ルーチンパンチ箱粒剤及び箱大臣粒剤は側条施用を推奨しない移植同時施薬機があることから使用前に確認する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並 (前年より多い)
(リゾープス菌)	—	平年並 (前年よりやや多い)
	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (ピシウム菌 /±、リゾープス菌 /±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗期間中、低温時はできるだけ温度を確保し、土壌の湿度を適切に保つ (ピシウム菌)。

イ、出芽期間中は32℃以上の高温にしない。また、育苗期間中は高温に注意し、適切な温度管理を行う (リゾープス菌)。

ウ、床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤、ナエファイン粉剤を使用しなかった場合は播種時にオラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤、ナエファインフロアブル、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルを使用する。

エ、ウの対策をしなかった場合は、出芽後、発病前にタチガレエースM液剤をかん注するか、出芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. イネミズゾウムシ	平年並 (前年並)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (±/)。

イ、前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年6月の食害株率が90%以上に達していたほ場では、次のいずれかの方法で防除を行う。

① パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08などのいずれかを育苗箱に施用する。

② ガードナーフロアブル、ダントツ水溶剤、バズ顆粒水和剤、ヘッド顆粒水和剤 (播種時処理) などのいずれかを育苗箱にかん注する。

③ コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤のいずれかを移植時に側条施用する。また、移植同時施薬機を用いる場合は、スタウトダントツ箱粒剤、スタウトパディート箱粒剤/ルーチンデュオ箱粒剤/ルーチンパンチ箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤、箱大臣粒剤、Dr. オリゼパディート粒剤、Dr. オリゼフェルテラ粒剤のいずれかで行う。

ただし、スタウトダントツ箱粒剤及びスタウトパディート箱粒剤/ルーチンデュオ箱粒剤/ルーチンパンチ箱粒剤及び箱大臣粒剤は側条施用を推奨しない移植同時施薬機があることから使用前に確認する。

イ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤及びプリンス剤に対して感受性が低下しているイネクビボソハムシ (イネドロオイムシ) が確認されている地域では薬剤の選択に注意する。

ウ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、6月上旬に防除の要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	平年並 (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている(±/)。

イ、前年の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、イネミズゾウムシを対象として移植前～移植時に殺虫剤を施用したほ場では、本種の防除の必要はない。

イ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤及びプリンス剤に対して感受性が低下している地域では薬剤の選択に注意する。

ウ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、産卵盛期(6月上～中旬)に防除要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	やや早い (前年並)	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、3月上旬～4月中旬の気温は高い～かなり高く経過し、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されていることから、越冬世代成虫の発生時期はやや早いと見込まれる(－/－)。

イ、前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、極端な早植えや遅植えを避ける。また、移植時の深植えや移植後の深水を避ける。

イ、前年多発したほ場では、パディート剤(スタウトパディート箱粒剤、デジタルミネクト箱粒剤等)、グランドオンコル剤(ブイゲットグランドオンコル粒剤等)、フェルテラ剤(ブイゲットフェルテラ粒剤、Dr. オリゼフェルテラ粒剤等)、プリンス剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、のいずれかを育苗箱に施用する。または、ガードナーフロアブルを育苗箱にかん注する。

ウ、イの育苗箱施用剤や育苗箱かん注剤を使用しなかった場合は、移植後に産卵状況を確認する。株当たり1.5卵以上又は産卵株率50%以上の場合には、被害初期にエルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン粉剤DL、トレボン粒剤のいずれかを散布する。

エ、本種の被害は突発的に発生するため、今後の予察情報等に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. フタオビコヤガ(第1世代) (イネアオムシ)	平年並 (－)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、前年の第3世代の発生量がやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと推定される(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では、フェルテラ剤（ブイゲットフェルテラ粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤等）、スピノ剤（プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤等）のいずれかを育苗箱に施用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. イネキモグリバエ (イネカラバエ)	—	少ない(—)

(1) 予報の根拠

ア、前年の発生量から、越冬量は少ないと推定される(/—)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では、以下の防除対策を行う。

- ① イネ科雑草の茎の中で越冬するため、6月上旬までに畦畔の除草を行う。
- ② グランドオンコル粒剤又はブイゲットグランドオンコル粒剤を移植当日に育苗箱に施用する。
ただし、カーバメート剤に対して感受性が低下しているイネクビボソハムシが確認されている地域では、本種に対する別途の防除が必要である。

B 小麦

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 赤かび病	平年並(—)	やや多い(前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、秋田地域振興局管内の定点調査によると、4月14日現在の幼穂長は9.8mm(平年差+0.1mm、銀河のちから)だった(±/)。

ウ、前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多肥栽培を避ける。

イ、1回目の防除は開花始期にシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルを散布し、2回目は1回目の防除から7～10日後にイオウフロアブル、石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、トップジンM粉剤DLのいずれかを散布する。

ウ、開花始期に1回目の散布ができないと予想される場合は早めに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	—	やや多い(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている(±/±)。

イ、前年乳熟期の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は厚播、多肥、過繁茂のほ場で発生しやすいため、適切な肥培管理に努める。

- イ、イオウフロアブル、ストロビーフロアブル、石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、プロパティフロアブルのいずれかを発生初期から2～3回散布する。
- ウ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

C 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. タマナヤガ	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月5半旬までの総誘殺数は14頭（平成21.6頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の除草を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報等に注意する。

D えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ネキリムシ類（タマナヤガ）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市大豆予察ほのタマナヤガフェロモントラップにおける4月5半旬までの総誘殺数は14頭（平成21.6頭）でやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内や周辺の除草を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

- ① クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。
- ② 播種時にカルホス粉剤を作条施用し、土壌混和するか、播種時にカルホス微粒剤Fを土壌表面に散布し、土壌混和する。
- ③ 播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤を土壌表面に散布するか、播種時～本葉2葉期にネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報等に注意する。

E りんご

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 腐らん病	—	多い(—)

(1) 予報の根拠

ア、4月上～中旬の巡回調査における発病樹率は4.5%（平年2.5%）でやや高く、発病地点率は40.9%（平年23.7%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、雪害を受けた部位は早めに整形し、切除・伐採した枝は園内に放置せず、焼却する。

イ、樹体検診を実施し、早期発見と適切な処置に努める。

ウ、胴腐らの横径が枝幹部の2/3以上に拡大している場合は、治癒が困難なため、速やかに切除・伐採し処分する。

エ、「泥巻き」は病斑部を削り、草つき土で覆い、ビニールなどを巻く。前年に処置した部分は土を取り除いて治癒状況を調べ、必要によって再度処置を行う。

オ、雪害の整形部及び剪定痕にはトップジンMペースト又はバッチレート塗布する。

カ、枝腐らんを剪去した後及び病斑の削り取り後（健全部を含め紡錘状に大きく削る）にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝、削り屑は園内に放置せず、焼却する。

キ、トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らの削り取り後のみに使用する。薬害防止のため剪定及び枝腐らん剪去後の切口には使用しない。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病（実ぐされ）	県北部 早い(—) 県中央部・県南部 やや早い(—)	県北部 平年並（前年並） 県中央部・県南部 やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、ふじの展葉期は、かづの果樹センター（鹿角市）が4月13日（平年4月23日）で早く（- / ））、果樹試験場（横手市）が4月12日（平年4月17日）でやや早かった（- / ））。

イ、4月26日現在、果樹試験場（横手市）におけるふじの予測開花日は平年（5月7日）より4日程度早まると予想されている（- / ））。

ウ、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ / ± ））。

エ、県北部における前年の実ぐされ発生量から、越冬伝染量は平年並と推定される（ / ± ））。

オ、県中央部・県南部の4月4～5半月の巡回調査における葉ぐされ花そう率は0%（平年0.0%）でやや少なかった（ / - ））。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、葉（花）ぐされ、実ぐされは見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。ひこばえは剪去する。

イ、葉ぐされの発生状況に応じて、次により防除を行う。

① 展葉期に発生が多い場合は、速やかにトップジンM水和剤 1,000倍液を散布する（展着剤はニーズ 1,000倍とする）。

② 開花直前に葉ぐされの発生が見られた場合は、速やかにアンビルフロアブル 1,000倍液、インダーフロアブル 5,000倍液、オンリーワンフロアブル 2,000倍液、サンリット水和剤 3,000

倍液のいずれかを散布する。

- ③ 多発園及びその周辺では実ぐされ防止のため、中心花満開期にトップジンM水和剤 2,000倍液を散布する。さらに、株ぐされ防止のため、落花直後にアンビルフロアブル 1,000倍液又はスコア顆粒水和剤 3,000倍液を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 黒星病	早い (-)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
 イ、子のう胞子の最多飛散確認日は、かづの果樹センター (鹿角市) が4月18日 (平年4月26日) で早く、果樹試験場 (横手市) も4月17日 (過去2カ年平均4月23日) で早かった (-/)。
 ウ、前年の発生量は平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内の発生状況をよく観察し、発病葉や発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却する。
 イ、開花期前後の防除については、4月16日発行の令和3年度農作物病害虫防除対策情報第2号を参照する。
 ウ、落花10日後以降の薬剤散布は10日間隔を基本とし、散布間隔が長くならないよう注意する。
 エ、苗木には展葉後にベフラン液剤25 1,000倍液を散布する。耐性菌に感染しているおそれがあるので、E B I 剤及びQ o I 剤は使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ナミハダニ	-	多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、前年9月の発生量が多かったことから、越冬量も多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の2回行い、発生密度の低下に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. リンゴハダニ	-	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、3月上～中旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0% (平年0.2%)、寄生地点率は0% (平年1.4%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生が多い場合は、落花直後にバロックフロアブル 2,000倍液を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. ハマキムシ類	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、前年秋期の発生量が平年並だったことから、越冬量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花直前又は落花直後に IGR 剤、BT 剤、サムコルフロアブル10 5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液のいずれかを散布する。特に、ミダレカクモンハマキが多く開花期間中に被害（巻葉）が目立つ園地では、落花直後の散布を必ず実施する。なお、本年は開花が早まると予想されるので、散布時期が遅れないように注意する。また、訪花昆虫保護のため、開花1週間前～落花直後やミツバチ設置期間は上記以外の殺虫剤は散布しない。

イ、マッチ乳剤は、サビ果発生のおそれがあるので、落花10日後から6月下旬までは散布しない。

ウ、交信かく乱剤は、ハマキムシ類成虫発生前の5月末までに設置する。使用する面積が広くまとまるほど効果的で（最低20a）、風通しの良い狭い園地や急傾斜地では効果が劣る。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類	平年並（—）	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、前年秋期の越冬量調査におけるクサギカメムシの越冬数は、平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、飛来数が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤のいずれかを2,000倍液で散布する。

ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

F なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	早い（前年よりやや早い）	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、潟上市予察ほにおける子のう胞子の初飛散は4月13日（平年4月24日）で早かった（—/—）。

ウ、前年9月の巡回調査における発病果そう葉率はやや低かったが、9月の降水量がかなり多かったことから、越冬伝染源量はやや多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、芽基部病斑を切除し、園外へ搬出し処分する。腋花芽利用率が高い園地では芽基部病斑が多い傾向があるため注意する。

イ、開花直前とその7～10日後（落花直後）にEBI剤を散布する際には耐性菌出現回避のため保

護殺菌剤を加用し、散布間隔は10日以上空けない。

ウ、落下直後にスクレアフロアブルを散布する際には、耐性菌出現回避のため保護殺菌剤を加用する。また、スクレアフロアブルは花粉の発芽率を低下させる事例が報告されているので、受粉が終了した翌日以降に使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	早い（前年より早い）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、果樹試験場（潟上市）における南水の展葉日は4月17日（平年4月25日）で早かった（-/）。

ウ、前年9月の巡回調査における発病果そう葉率から、越冬伝染源量は平年並と推定される（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除する。

イ、落花期から袋かけまでの期間が果実感染防止の重点時期であることから、袋かけ作業は遅れないようにする。

ウ、落花直後から7～10日ごとにオキシラン水和剤 600倍液、チオノックフロアブル 500倍液、トレノックスフロアブル 500倍液、デランフロアブル 1,000倍液、ベルコート水和剤 1,500倍液、ナリアWDG 2,000倍液、ユニックス顆粒水和剤47 2,000倍液のいずれかを散布する。

エ、ユニックス顆粒水和剤47は単用せず、主剤に加用して散布する。

オ、発病の多い品種は南水、八雲である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ナミハダニ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、前年9月の発生量から、越冬量は多いと推定される（/+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は剪去し、焼却する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. リンゴハダニ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、3月の巡回調査における越冬卵の寄生枝率は0%（平年0.1%）、発生地点率は0%（平年1.8%）でいずれも平年並だった（/±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生園では落花直後にバロックフロアブル 2,000倍液を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 果樹カメムシ類	平年並（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、前年秋期の越冬量調査におけるクサギカメムシの越冬数は、平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、飛来数が多い場合は、落花以降にエルサン水和剤40 800倍液又はスミチオン水和剤40 800倍液を散布する。ただし、スミチオン水和剤40は展葉直後の柔らかい葉で薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので注意する。

ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

G ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒とう病	やや早い（－）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温及び降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、ぶどうの初期生態はやや早いと見込まれる（－/ ）。

ウ、前年の発病果穂率及び発病葉率は、キャンベル・アーリー及び巨峰のいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは特に感染しやすいので注意する。

イ、伝染源となる前年の被害枝（結果母枝）や巻きひげは、切り取って処分する。

ウ、新梢伸長期にオーソサイド水和剤80 800倍液、新梢長15～20cm頃にデランフロアブル 1,000倍液を散布する。ただし、デランフロアブルは展葉数2～3枚時に散布すると薬害（葉の褐変）を生じるおそれがあるので注意する。

エ、発生が多い園では、5月中～下旬にインダーフロアブル 8,000倍液又はマネージDF 6,000倍液を散布する。

IV. 気象予報

令和3年4月22日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（4月24日～5月23日）

(1) 予報のポイント

高気圧と低気圧が交互に通過し、天気は数日の周期で変わるでしょう。
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は、ほぼ平年並の見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

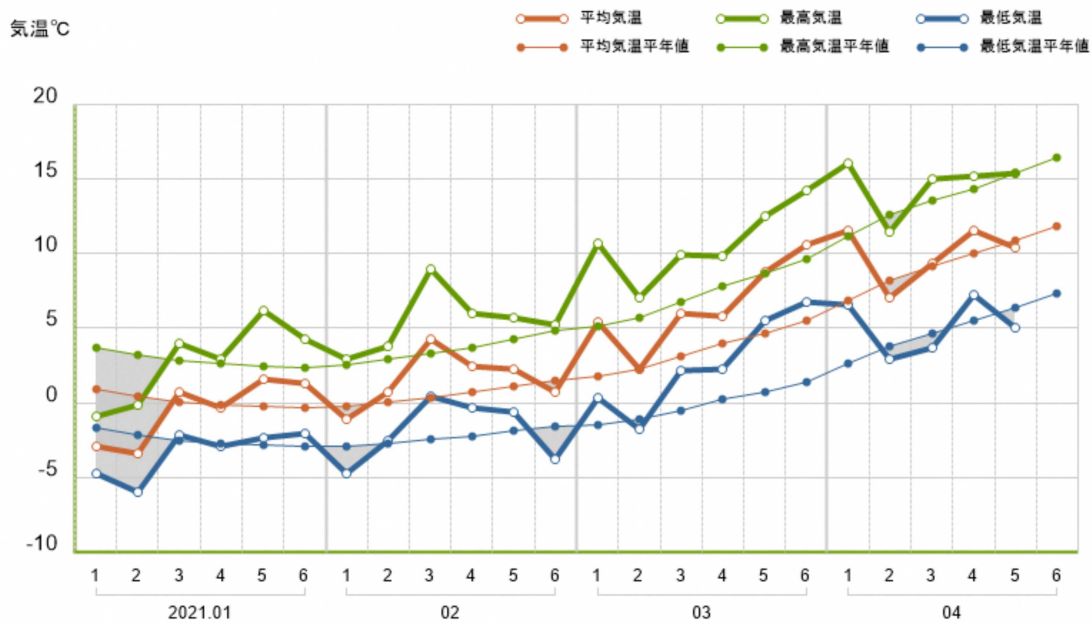
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	30%	40%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

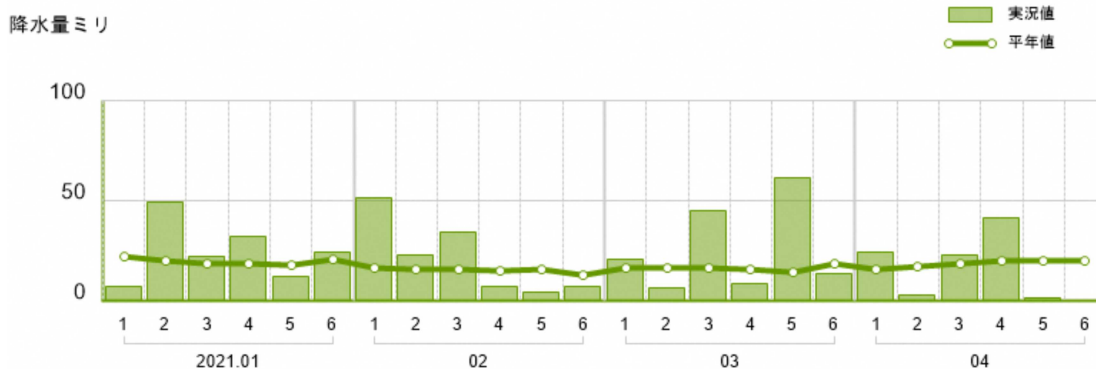
	低い	平年並	高い
4/24～30（1週目）	20%	50%	30%
5/1～7（2週目）	40%	30%	30%
5/8～21（3～4週目）	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～4月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い	平年並					やや遅い	遅い				

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
 - ・ 家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。

- 農薬の取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水等の容器など）へ移し替えない。